

青春ドラマ追想紀行蔵のある 国場



決闘の火ぶたが切って落とされる。 喜多方中学校だった。そして、会津鶴ヶ城・桜馬場を舞台に、 に回しては、勝負にならない」と、退学同然に転校した先が 麒六率いる喜多中・猛者連と若松の会津中・昭和白虎隊との ついには、軍事教練でサーベル教官と衝突。「帝国陸軍を敵 旧制岡山第二中学校の南部麒六は、大の喧嘩好きだった。

けんかえれじい」 の舞台を訪ねる

南部麒六

名作に描かれた意外な素顔

いる。 (一九八〇年) でキネマ旬報の作品賞を入〇年) でキネマ旬報の作品賞を入〇年) でキネマ旬報の作品賞を入〇年) でキネマ旬報の作品賞を

かつての映画大好き少年にとっ

び上がってきた。である前に、「けんかえれじち」である前に、「けんかえれじち」である前に、「けんかえれじち」である前に、「けんかえれじち」である前に、「けんかえれじて、喜多方は「蔵とラーメンのまて、喜多方は「蔵とラーメンのま

に並んだ、背の高いポプラの首を回らすと、校庭の周辺

(小説「けんかえれじい」から)

戊辰戦争では悲劇の舞台に(会津若松市)奥州の名城・会津若松城(鶴ヶ城) 維新の



「日本のユングフラウ」と呼んだ どこか気品漂う山塊を麒六は

のそれに負けない迫力を見せる。 津弁の激突が、スクリーン上の拳 では、時折岡山なまりの混じる会 「会中対喜多中」の決闘の場面

ける」 会中!若松市長のようなメッ おっけていられっか。おい! 叩いてささやいた。 セージこくでねえ」 タかき廻さっちえたまっか」 喜多方の田吾作風情にガタガ 「

おっけろたって、

これが 「おっけろ(やめろ)、おっ すると、忘哉が麒六の肩を このがき!会津若松市は 潔白なおらたちの街だ。

屋) だ」 じゃ。耶麻ごおりは塩川の親 方様(おやかあつつあま)(庄 親はれっきとした会津人 「他国者じゃと?わしの両 「だまれ!他国者!」

べて、おら達 (たつ) は会津 士族の後裔だわ。 百姓には違 (つが) いなかん キモイリでも、どっち道どん 「ふん、親かっつぁまでも 無礼者!」 (小説「けんかえれじい」から)

作者は、中学生同士の喧嘩を、

会津士族 対 親方様

hί

喜多方の米騒動



「けんかえれじい」キャスト 南部麒六......高橋英樹 道子......浅野順子 スッポン.....川津祐介 タクアン......片岡光雄 麒六の父......恩田清二郎 道子の母......宮城千賀子 近藤大尉.......佐野浅夫 喜多方中校長…玉川伊佐男 アヒル先生……浜村純 マンモス先生…加藤武 金田.....野呂圭介 みさ子.....松尾嘉代

日活が日本映画掘り起こしシリーズとしてDVD化、家庭 で楽しめる (DVN-48)。「続・けんかえれじい」はシナリオまでで

きているが、まだ映画化されてい ない。続編で、麒六は早大から学 徒出陣で中国戦線へ。

よむ 小説「けんかえれじい」 は1977年にTBS出版会が単行本 発行。82年には、角川書店が文庫 本化した。



会津喧嘩史

1505 (永正2)年、塩川の合戦。1584 蘆名氏が戦 (天正12)年、松本太郎の乱 国大名に成長するまでには、骨肉の争いが 続いた。

1589(天正17)年 摺上原の合戦。伊 達政宗対蘆名義広。政宗が完勝し、南進の 拠点となる黒川城(会津若松城)を確保。

1590 (天正18)年 奥州仕置き。豊 臣秀吉対伊達政宗。秀吉が戦わずして貫禄 勝ち、会津は蒲生氏郷の支配に。

1868 (明治元)年 会津戦争。新政府 軍対会津藩。砲火にさらされる若松城を望 む飯盛山で、少年白虎隊は自刃。

1883 (明治15)年 喜多方事件。福 島県令・三島通庸対農民。大峠道路建設を めぐる対立は自由民権運動のうねりへ。

1935(昭和10)年? 鶴ヶ城桜馬場 の血闘。喜多中猛者連対会中昭和白虎隊。 喜多中の大逆転勝利。両校のもみ消し?に より事実関係は不明。

> みばえがええも h だ لح

そんな事」

多方町と違うんか。 動ののろしをあげたんは、 揆とぬかしたが、自由民権運

え ?

しゃあどっちでもええがのう

だわって見せる。 である会中の白鉢巻姿をほめる場 てくれだけだべ」 でねえか。 面では、「ばかこけ、 番保身(ほすん)になるっつう 鉢巻みてえもんは、 と喜多方流にこ 頬っかむりが

の方し に代表されるというわけだが、 には、どちらも同じ盆地の中。「 際には果たしてどうなのか。 いは、「白鉢巻」と「頬っかむり」 会津若松と喜多方の生き方の違 と「北の方」の違いはあっ どこに境界線があるの

あるという。 喜多方地方には、 こん な教訓

ようでは、 男四十に いっちょうまえでな て蔵を建てられ な

えれじい」 臭く、どこか哀愁の漂う「け み入れてい 会津に対する撞着と反発、 の舞台にいつしか足を た そし 'n か

白壁土蔵、柳、水面... ゆったりと時間が流れる

現れる。

鉄橋を渡る時、

急カーブで速力が落ち始めると、突然、

猫魔の山塊に隠れて磐梯の姿は見えなくなる。

美な線は素晴らしかった。なで育った麒六の心を慰めた。

若松駅を出て塩川駅に近づくと、

て麓に下がる程優

惹かれた。垂れ下がった枝葉の先が、エメラルド色の水に浸かっ

筆先のようなタッ

麒六は白壁土蔵の傍の一本の柳に心を

水量豊かな日橋川



(「けんかえれじい」から)

小説「けんかえれじい」の時代

チで、それは終日流れの上を掃いていた。てゆっくり動いているのである。柔らかな、

景がそう大きく変わっていないこ

とに驚かされる。

の時間は相変わらすても、土蔵や柳の周囲スピードは増してはいても、景色が飛び去るがら、景色が飛び去るがらである。

の入り口だった。カーブは、別の世界へかっていい。

ゆったりと流れている

ように感じられた。

朝夕車窓から眺められる大磐梯の山容は、

デジャ・ヴュ な街

30



る農家の風景 (杉山集落) 庭先での小豆の選別、収穫期によく見かけ

猫魔の山懐、

日橋川を渡る

(一八七五) 年に町村制ができた 盆地の北部は、江戸時代から会津 現在の喜多方市を中心とした会津 わば南北の境界線だった。明治八 のシーンに登場する日橋川が「い (きたかた)」と呼ばれてきた。 〔若松) との位置関係を表す「北方 地元の郷土史研究家によると、 こ

見つけることはできな つと、ツタに覆われた 広がっていた。 川の向こうにいくつも 蔵のある風景が、日橋 かと錯覚するような、 の流れが止まっている かった。しかし、時間 の白壁土蔵は、ついに 心を惹かれた柳のそば た」という。 方』と総称されてき 側一帯はやはり『北 ではなく、日橋川の北 多方』に変わったわけ 方』がこの時から『喜 と当てた。だから、『北 ときに、『喜び多き方』 喜多方の駅に降り立 残念ながら、麒六が

グレコ」を連想したからだろう れたのは、岡山県・倉敷の「エル・ ſί ている。 が、「おいで、おいで」と呼び掛け 朝日を浴びてキラキラなびく葉 ヒーの香りが、レトロな空間に漂 一瞬、デジャ・ヴュに捕らわ 挽きたてのダッチコー 煉瓦蔵が待っていた。

既視感を体験することになった 中で、私は幾度となく同じような この後、蔵の街並みを彷徨する か。

細部に神が宿る日常空間 技の巧みと機能美

冠木家蔵座敷のヒミツ



黒漆喰がどっしりした印象を見せる踏み石・煙返し 扉は開かれた状態で内側には土戸、板戸・障子戸の 三重の引き戸がはめられている



座敷蔵へつながる庭の小道。両側に道具蔵、味噌蔵、 質蔵黒などが並ぶ。今は会津型の再現・活用に取り 組む「染色グループれんが」の工房などに利用

る。会津名産の「身不知柿」は、枝実が白壁にしなだれかかってい そう広くはないが、ツタに覆われ 付けるからと聞いたが、 が折れるばかりにたくさんの実を 瓦に覆いかぶさり、色付き始めた と、青空を背に、 まれている。通りに面した間口は 存した店蔵の豪壮さに比べると、 た塀が小路に沿って延々と続く。 しっとりと落ち着いた雰囲気に包 「蔵の里」に喜多方市が復元保 狭い小路から塀越しに見上げる 柿の木の枝葉が

旧家の暮らし見つめ百五十年

にしたのは初めてだった。

治めた蒲生氏郷から旧功を認めら 敵・伊達氏に敗れると、 た。摺上原の合戦で、蘆名氏が宿津を支配した蘆名氏の家臣であっ会津若松城= 鶴ヶ城) を拠点に会 後へと逃れた。 しかし、豊臣秀吉 にまでさかのぼる。 の命で伊達政宗に代わって会津を 現在の当主・啓次さんの嫁とし 冠木家の系譜は、 代々この地を守ってきた。 黒川城 (後の 戦国時代以前

た冠木家は、

蔵の街のメーンスト

呉服太物問屋として大店を張っ

見せていた。

フする辺りに静かなたたずまいを

ト・中央通りが緩やかにカー

「喜多方に冠木姓は多いのですが、「本のといってもここが一番。正統なんといってもここが一番。正統なんといってもここが一番。正統なんといってもここが一番。正統なんといってもここが一番。正統なんといってを立めばあり返る。

幾何学模様の謎解き

を掛けると、かかとが土間に届かないほど高い。蔵座敷西側の出入り口は、さらに二段高くなっていり口は、さらに二段高くなっていら「踏み石」の次が「煙返し」。黒る。「踏み石」の次が「煙返し」。黒る。「踏み石」の次が「煙返し」。黒が喰が、磨き上げられた御影石の最を掛けると、かかとが土間に届かないほど高い。蔵座敷西側の出入がり口は、さらにも見える。



ビュッフェの絵のように

光と闇を支配し、 家族を守る 要塞が



部は内側に向かって複数の四角形

の数に合わせて、外から見た開口

が遠近法のように重なって見え

る。開け放った扉の方は、逆遠近

額縁のように見える「ひだ(襞)」、蔵の窓は一幅の絵画を連想させる

ほど重厚感にあふれ、全体として る。黒と白の漆喰を使った塗り分 黒漆喰で塗られ、白漆喰の他の部 になる「女戸」は、ともに内子が だから、上に重なる「男戸」と下 かける意匠だが、歴史を経たもの けは、喜多方に限らず蔵によく見 分とみごとなコントラストを見せ この蔵座敷の場合は、 観音開き

ることもあったという。

の「乗り」でアドリブ的に描かれ は施主の依頼というよりは、職人 持ちも想像がつく。 実際、「 鏝絵」

鏝絵」を描きたくなる職人の気

内側の「小面」に鶴亀や花などの

ひだ」を額縁に見立てれば、扉の

精緻な技巧を凝らしたのだろう。

襞)」と呼ぶこの個所にとりわけ

を描くから、棟梁や左官が「ひだ る。それ自体が美しい幾何学模様 法でピラミッドの台座のようにな の段差で扉の下面の隙間を遮断し きの扉を閉めたとき、 煙返し」は名前の通り、観音開 小さな三つ

のか分かったような気がした。 辺の美しさが、どこからきている この説明を聞いて、蔵の扉・ 煙返しのために付けた小さな段

防火の役割を果たす。



1914 (大正3)年ごろの冠木呉服店(冠木家提供)。 店主を中心にした記念写真らしく、三輪車にまた がった子供の姿も。現在は「蔵の里」に復元保存さ れている

一般に公開されている座敷蔵としては「甲 斐本家蔵座敷」がある。併設の蔵展示館には美術工 芸品が多数展示されている(0241-22-0001)



ベル

チー

滑らかな光を放って美しい西の間から見た奥の座敷。漆が塗られた杉板張りの天井、長押は

こともある。

ような印象を抱かせる蔵に出会う

漆の魔力と「光の間

えるかも知れない。 性を高める効果を持つという。 だけでなく、虫食いを防ぎ、耐久 珀色の幅広な長押との色バランスト 検張りの天井は鈍く黒く輝き、琥 が落ち着いた感じを醸し出してい た漆の魔力によるものだろうか。 感じられるのは、 かすかに息づいているかのように 漆は木の肌合いを引き立たせる 知恵と技巧の総合芸術ともい 木目が透けて見える素材が、 幾重にも塗られ

があることが分かるが、 に上る構造になっている。 並び、五段の箱階段を使って二階 手前の間は、左に神棚、 外に回ると片開きの小さな窓 家具も 仏壇が 右手



観音開きの扉と板戸



【喜多方の蔵の里】喜多 方市字押切2丁目109 蔵を中心に喜多方の歴 史的建造物を復元、公 開している。年末年始 休館、入場料必要。 0241-22-6592

蔵座敷の主、啓次さんは、

いた

「ありゃ、見られてしまったか」とに放り出された紙飛行機を発見した。よく見ると、見慣れない形した。よく見ると、見慣れない形とには、折り目に定規を当てたようには、折り目に定規を当てたようには、折り目に定規を当てといいである。中では、が関いしく、温もりのあるどこか懐かしく、温もりのある

これに対しい。 これに対しい。 とほとんあって襖を閉

て、南面に一

れさせられる。っとをついる。っとをついる。っとができ、ことができ、からの明るい日ができ、からとができ、からができ、からとない。っとかができ、からいいる。っとかでき、からいいる。っとかできいる。っとかできいる。っとかできる。っとかできる。っとかできる。っともいる。っともいる。っともいる。っともいる。っともいる。

ている。蔵は生き

緻な構造に、驚くとともに、

人と財産を守る要塞としての蔵

本質を垣間見た。

世界に。一針の光さえ漏れない精

た。ずら少年のような表情をのぞかせ

を見やりながら、ぼんやりそ を見やりながら、ぼんやりそ をこ人がかりで左右から引き合 で、生戸の三重構造で、分厚い板 で煙返し」の外側は障子戸、板という。 という。 をことを考えていると、ご主人 が、「ここを閉めてみましょうか」 という。



中通りに沿って蔵並みが続く